

青年の悩みにおける秘匿と告白

小西 千秋¹ 宮下 一博²

¹ ブリティッシュ・コロンビア大学 ² 千葉大学

Concealment and confession of personal concerns in adolescents

Chiaki KONISHI¹ Kazuhiro MIYASHITA²

¹University of British Columbia ²Chiba University

キーワード：秘匿 (concealment) 告白 (confession) 青年の悩み (personal concerns in adolescents)

問題と目的

コミュニケーションは人間関係には不可欠のものであり、その一部は、悩みや私的な情報を打ち明けることによって行われる。この「打ち明ける」という行為は、社会における人間関係において非常に重要な役割を果たしている (Burnard & Morrison, 1992; Rieber, 1980)。

Jourard (1964, 1971) は、「打ち明ける」という行為を「自己開示」(self-disclosure) と呼び、彼の研究をもとに、それが精神的健康 (自己実現など) に与える影響について論じている。彼によると、少なくとも自分以外の一人の重要と思われる人物 (significant other) に真の自分を打ち明けることは、健康な人格形成にあたって必要不可欠であると言う。Maslow (1954) の提唱した「自己実現」(self-actualization) と関連づけて、低いレベルの自己開示は人格形成における発達の抑圧を暗示すると Jourard は述べている。このような、自己開示と精神的健康が関係する理由として、次のようなことがあげられる。打ち明けるという行為を経験しない者は、つまり、他者との親密な人間関係を築き上げることができず、その結果、健康的な人間関係が育まれない状態に陥り、精神的健康が阻害されるということである。

以上のように、精神的健康との関連で、「自己開示」の重要性が指摘されているが、1990年までの欧米諸国と日本におけるその研究の対象は大多数が成人した大人である (例えば、Jourard, 1971; Altman & Taylor, 1973; Derlega, Margulis, & Winstead, 1987; Pennebaker, Hughes, & O'Heeron, 1987)。1980年代後半から、子どもや青少年を対象にした研究も大人対象の研究に続いて次第に増え始める。先行研究の一例としてその概要を紹介すると、Hunter & Youniss (1982) は、アメリカ (ワシントン D.C. 周辺) の 4 年生 (平均 9 才)、7 年生 (平均 12 才)、10 年生 (平均 15 才)、そして大学生 (平均 19 才) の 4 つのグループの男女を対象に、その被調査者の親 (母、父それぞれ) と友人に対する自己開示を親密度 (Intimacy) の尺度を利用して測定した。そしてこの研究では、一般に女子が男子よりも自己開示が高く、また年齢別に見ると、高学年になるほど母親や父親よりも友人 (特に同性の友人) に対して自己開示が高くなるという結果を報告している。これらの性別、年齢別における自己開示の違いは、大人対象の研究と一致しており、他

の子ども・青少年対象の研究とも一致するものである (例えば、Blyth & Foster-Clark, 1987; Buhrmester & Furman, 1987; Camarena, Sarigiani, & Petersen, 1990; Crockett, Losoff, & Petersen, 1984; 飛田, 1986; Papini, Farmer, Clark, Micka, & Barnett, 1990; Rivenbark, 1971; 佐藤・下斗米・飛田, 1988)。

先行研究 (特に1970年から1990年にかけて) の多くは、上記のように性別や年齢別の自己開示の違いの検討に集中しており、悩みの内容との関わりについて検討しているものは僅かである (例として、Youniss & Smolar, 1985)。また、性格特性との関連について検討している先行研究は皆無である。そこで、本稿では、悩みの告白の変化を性別や発達的に見ることを目的にするのではなく、悩みの内容の違いとの関わりや性格特性との関連についても検討する。また、本稿では「打ち明ける」という開示の部分だけではなく、悩みを「かくす」という秘匿の部分にも焦点をあて、実際の告白・秘匿の態度と願望の上での告白・秘匿 (打ち明けたい、かくしたいという願望) との関連についても検討する。

予備調査

本調査で使用する悩みの質問紙の項目を選出するために、大学生120名を対象に、従来の研究 (津留・西平, 1986; 依田, 1980) を参考に作成した悩みを測定する72項目に、6段階 (「非常に悩んでいる」「かなり悩んでいる」「やや悩んでいる」「あまり悩んでいない」「ほとんど悩んでいない」「全く悩んでいない」) で評定を求めた。これを因子分析 (主因子法により因子分析を行い、抽出した因子にヴァリマックス回転) を施した結果、Table 1 に示すような10の悩みの因子が抽出された。これら10の項目 (因子) を、悩みを測定する質問項目として使用することにした。

Table 1 悩みのカテゴリー

1. 自分の性格	2. 自分の容姿・体型
3. 自分の進路	4. 自分の学業成績
5. 対人関係	6. 自分の恋愛問題
7. 自分の家庭 (家族) 問題	8. 政治問題
9. 自分の金銭	10. 自分の健康

本調査

対象：高校1年生167名、大学2年生・3年生181名

時期：1989年10月下旬～11月中旬

方法：以下の5つの質問紙を実施した。

- (1) 悩みを問う質問紙：予備調査に基づいて作成された悩みを測定する10項目（Table 1 参照）の中から、最も現在の自分が悩んでいるもの上位2つを順位付けて選べせ、各々その程度を4段階（「非常に悩んでいる」～「あまり悩んでいない」）で評定させた。なお、各項目とも、悩んでいるほど高得点となるよう4～1点を付与した。
- (2) 対象別の秘匿・告白の程度を測定する質問紙：青年にとって最も身近だと思われる父、母、教師、同性の友人、異性の友人の5つの対象それぞれに対して、(1)の質問紙で選んだ2つの悩みをどの程度かくしたり、打ち明けたりしているかを4段階（「積極的に打ち明けている」「なんとなく打ち明けている」「何となくかくしている」「積極的にかくしている」）で評定させた。各項目とも、打ち明けているほど高得点となるよう4～1点を付与した。
- (3) 秘匿・告白の理由を問う質問紙：上記の5つの対象それぞれに対して、かくしたり、打ち明けたりする理由を、2つの悩みごとに、「かくす理由」あるいは「打ち明ける理由」の各9項目（Table 2 参照）の中から1つずつ選べせた。その際、質問紙(2)で「積極的にかくしている」「何となくかくしている」を選んだ場合は「かくす理由」から、「積極的に打ち明けている」「何となく打ち明けている」を選んだ場合は「打ち明ける理由」からそれぞれ1つを選択させた。

Table 2 理由のカテゴリー

かくす理由（秘匿）	打ち明ける理由（告白）
1. 言っても分かってもらえないから	1. 自分を理解してもらいたいから
2. 同情されたくないから	2. なぐさめてもらいたいから
3. 信頼できないから	3. 信頼できるから
4. 自分のことをよく知っていないから	4. 自分のことをよく知っているから
5. 聞かれなかったから	5. 聞かれたから
6. ばかにされそうだから	6. ばかにされそうもないから
7. 干渉されそうだから	7. 干渉されそうもないから
8. 援助や協力が得られそうだから	8. 援助や協力が得られそうだから
9. 自分より考え方が大人でなさそうだから	9. 自分より考え方が大人だから

- (4) 対象別の秘匿・告白の願望の程度を測定する質問紙：質問紙(2)では実際の行動をたずねたが、ここでは願望としての秘匿・告白の程度について質問紙(2)と同様の形式で評定させた。
- (5) 性格検査：被調査者の性格特性を見るために、『モーズレイ性格検査（MPI）日本版』を実施した。所定の様式に従い、外向性、神経症的傾向、および虚偽尺度得点を算出した。

結果と考察

分析に先立ち、『モーズレイ性格検査（MPI）日本版』

の虚偽尺度得点が21点以上の者（MPIの通常の基準）および質問紙(1)で選択した2つの悩みのいずれかにおいて「悩んでいない」という方向の選択肢を選択した者を除外した。その結果、残った299名の被調査者について以下の分析を行った。なお、(1)の質問紙において上位1, 2位を選ばせ、1, 2位別に分析を行ったが、この両者の結果にさほど違いが見られなかったため、分析と考察は1位のものだけに絞ることにした。調査結果とその考察は、以下の通りである。

1) 悩みの内容の発達の変化

Table 3に見られるように、悩み項目の「自分の進路」、

Table 3 悩みの内容の発達の変化 単位 % () 内は人数

	1. 自分の性格	2. 自分の容姿・体型	3. 自分の進路	4. 自分の学業成績 (注)	5. 対人関係	6. 自分の恋愛問題	7. 自分の家庭問題 (注)	8. 政治問題 (注)	9. 自分の金銭	10. 自分の健康 (注)
大学生 (165)	2.9 (10)	3.3 (11)	7.4 (55)	1.4 (5)	7.7 (25)	11.0 (35)	0.9 (3)	0.3 (1)	4.5 (15)	1.5 (5)
高校生 (134)	5.8 (16)	4.1 (11)	6.7 (17)	12.0 (99)	6.0 (16)	6.1 (16)	0.8 (2)	1.0 (3)	5.2 (14)	1.5 (4)
χ^2	3.21	0.25	17.24	32.05	0.64	4.49	0.05	0.51	0.15	0.10

(注) イェーツの補正を適用した。

* $p < 0.05$ *** $p < 0.005$

「自分の学業成績」、 「自分の恋愛問題」において高校生・大学生間に有意差が見られ、「自分の進路」や「自分の恋愛問題」では大学生群が高い割合を示し、「自分の学業成績」では、高校生群の方が高い割合を示した。大学生の方が「自分の進路」や「自分の恋愛問題」を多く選択したという結果は、おそらく、成長とともに自分の人生の種々の問題に向き合う機会が増えることが関係していると思われる。また、「自分の学業成績」を高校生群の方が多く選択しているという結果については、大学受験に重点をおく昨今の日本の社会背景を浮き彫りにしていると言えるのではなかろうか。

2) 5つの対象（父、母、教師、同性の友人、異性の友人）別の秘匿・告白の程度の発達の変化

Table 4 対象別にみた秘匿・告白の程度の発達の変化

	大学生	高校生	t 値
父	2.23	2.33	-0.99
母	2.56	2.67	-1.00
教師	2.02	2.02	0.02
同性の友人	3.20	2.91	2.99***
異性の友人	2.68	2.08	6.36***

*** $p < 0.005$

Table 4に見られるように、同性および異性の友人において、大学生群の得点の方が有意に高かった。すなわち、高校生群に比べて大学生群の方が同性・異性の友人に対して悩みを告白する程度が高いという結果が得られた。これは、青年の家庭からの自立に伴い、友人関係が（家庭関係と比較して）益々重要なものとなることを示唆する先行研究の結果と一致するものである（Blyth & Foster-Clark, 1987; Buhrmester & Furman, 1987; 飛田, 1986; Papini, Farmer, Clark, Micka, & Barnett,

Table 5 対象別にみた秘匿・告白の程度の性差

	男性	女性	t 値
父	2.33	2.23	0.91
母	2.55	2.65	-0.90
教師	2.01	2.03	-0.20
同性の友人	2.96	3.16	-2.18*
異性の友人	2.34	2.47	-1.34

* $p < 0.05$

1990; Rivenbark, 1971; 佐藤・下斗米・飛田, 1988)。

さらに性差を見ると, Table 5 に見られるように, 同性の友人に対して女性の方が男性に比べて有意に告白の得点が高いが, これは女性の方が開示得点が高いことを示唆する先行研究の結果と一致するものである (Camarena, Sarigiani, & Petersen, 1990; Crockett, Losoff, & Petersen, 1984; Papini, Farmer, Clark, Micka, & Barnett, 1990; Rivenbark, 1971)。

3) 対象 (父, 母, 同性の友人, 異性の友人) 別に見た秘匿・告白の理由の発達的变化

秘匿・告白の対象別に, 秘匿・告白の理由の発達の差異を分析し, 有意差の見られたものを Table 6 にまとめた。

Table 6 対象別に見た秘匿・告白の理由の発達差

単位 % () 内は人数

	秘匿		告白	
	母 理由 5. 聞かれな かったから		同性の友人 理由 4. 自分の ことをよく知っ ているから	異性の友人 理由 5. 聞かれ たから
大学生	20.0 (31)		12.5 (32)	2.5 (8)
高校生	10.2 (11)		4.4 (7)	6.2 (12)
χ^2	5.68*		8.07***	4.45*

* $p < 0.05$ *** $p < 0.005$

「告白」の理由では, 同性の友人に対して「自分のことをよく知っているから」という理由において大学生群の割合が有意に高く, 同性の友人に対する「聞かれたから」という理由では高校生群の割合が有意に高いという結果が得られた。一方, 「秘匿」の理由では, 母親に対する「聞かれなかったから」という理由において, 大学生群の方が有意に高い割合を示した。「告白」の部分の結果の理由として考えられることは, やはり青年期が進むにつれて友人に対する親密さが増加していくということがあり得る。「秘匿」の部分の結果の理由として考えられることは, 加齢に伴う親, 特に母親に対する消極な態度のあらわれがあるのではないかと推測され, これはまた, 加齢に伴う友人に対する親密度の増加を裏づけるものと考えられる。

さらに, 秘匿・告白の理由を大学生・高校生込みの全体について対象 (父, 母, 教師, 同性の友人, 異性の友人) 別に最も多く選択されたもので見ると, 「告白」の理由としては, 「援助や協力が得られそうだから」という道具的機能によるものが父親と教師に対して高い割合を示し, 母親に対しては, 「自分のことを知っているから」という情緒的機能によるものが高い割合を示した。同性

の友人に対しても「信頼できるから」という情緒的な理由が高い割合を占めた。異性の友人に対しては, 同じく情緒的理由ではあるが, 「自分を理解してもらいたいから」という積極的な告白行動をうかがわせるような理由が上位に挙げられた。一方「秘匿」の理由としては, すべての対象について「聞かれなかったから」という理由が最も多かったが, 父親, 母親の対しては「干渉されそうだから」という理由が次に多く, この結果から両親との接触を拒む大学生・高校生の態度をうかがうことができる。また, 教師に対しては「自分のことをよく知っていないから」という理由が高い割合を示し, これは教師との対人的距離の遠さを意味すると考えられる。さらに, 「ばかにされそうだから」という理由が同性の友人に対して多く見られたが, これは同性の友人をライバル視する態度のあらわれではないかと思われる。

4) 対象 (父, 母, 教師, 同性の友人, 異性の友人) 別の実際の秘匿・告白とその願望との関係

対象別に実際の秘匿・告白の行動とその願望との相関を算出し, その結果を Table 7 にまとめた。Table 7 からわかるように, 大学生群・高校生群ともに, 全ての対象者に対して相関係数 (r) が 0.50 から 0.80 の数値を示し, 高い正の相関が見られる。このことから, 青年の実際の秘匿・告白の行動は, 秘匿・告白の願望とかなり対応していることがわかる。

Table 7 発達的に見た実際の秘匿・告白の行動とその願望との相関

	大学生					高校生				
	父	母	教師	同性の友人	異性の友人	父	母	教師	同性の友人	異性の友人
r	0.57	0.65	0.59	0.57	0.51	0.60	0.73	0.57	0.56	0.57

r : 相関係数

Table 8 男女別の実際の秘匿・告白の行動とその願望との相関

	男性					女性				
	父	母	教師	同性の友人	異性の友人	父	母	教師	同性の友人	異性の友人
r	0.51	0.64	0.52	0.57	0.54	0.63	0.72	0.62	0.57	0.60

r : 相関係数

また, 男女別に見てみると (Table 8 参照), 対象者のほとんどに対して, 女性が男性よりも高い数値を示していることがわかる。

5) 対象 (父, 母, 教師, 同性の友人, 異性の友人) 別の秘匿・告白の程度と性格特性との関係

質問紙(2) (対象別の秘匿・告白の程度を測定する質問紙) の各対象 (父, 母, 教師, 同性の友人, 異性の友人) のそれぞれについて, 「積極的に打ち明けている」「何となく打ち明けている」という「告白」の方向に回答した者と, 「何となくかくしている」「積極的にかくしている」という「秘匿」の方向に回答した者の MPI の 2 つの下位尺度得点 (外向性尺度・神経症的傾向尺度) の差異を検討した。その結果をまとめたものが, Table 9 である。なお, ここでは, 大学生群と高校生群がほぼ同様の傾向を示したので両群を込みにした分析を行った。

それによれば, 大半の対象者 (教師, 同性の友人を除

Table 9 対象別の秘匿・告白による性格特性の差異

対象	性格特性	秘匿	告白	t 値
父	外向性	30.21	31.99	-1.39
	神経症的傾向	26.88	22.85	3.50***
母	外向性	30.23	31.32	-0.89
	神経症的傾向	26.97	24.23	2.49*
教師	外向性	31.11	29.51	1.03
	神経症的傾向	25.65	24.85	0.56
同性の友人	外向性	30.37	30.94	-0.39
	神経症的傾向	24.59	25.76	-0.88
異性の友人	外向性	29.35	32.94	-2.95***
	神経症的傾向	26.35	24.28	1.83*

* $p < 0.05$ *** $p < 0.005$

く)に対して、「秘匿」の態度をとる者の方が神経症的傾向得点が高く、また、異性の友人に関しては、「告白」の態度をとる者の方が外向性得点が高いという結果が得られた。これらの結果は、全体的に秘匿の態度をとる者の方が引っ込み思案な性格特性をもっている、つまり、なかなか心の内を話せないということを示すものと考えられる。

まとめ

本研究の主な結果をまとめると、以下のようになる。

1. 本研究では、加齢に伴う友人に対する開示の増加、そして男性に比べて女性の方が開示度が高いという先行研究と一致する結果が得られた。
2. 対象別に見た秘匿・告白の理由の変化では、父親や教師に対しては「援助や協力が得られそうだから」という道具的機能によるものが「告白」の理由として高い割合を示し、母親、同性・異性の友人に対しては、「自分のことを知っているから」、「信頼できるから」、「自分を理解してもらいたいから」という情緒的機能によるものが高い割合を示した。このように、同じ親でも父親と母親に対する違いが認められた。一方、「秘匿」の理由として、父親、母親で「干渉されそうだから」という理由が多く選ばれたことは、両親との接触を拒もうとする大学生・高校生の態度が示されたものと言えよう。
3. さらに、性格特性との関係では、「秘匿」の態度をとる者の方が神経症的傾向が強いという結果が得られたが、これは、先に述べた Jourard (1964, 1971) の自己開示と精神的健康との関係と符合すると思われる。Pennebaker et al. (1987) も、精神的・身体的健康を考える上での自己開示の重要性、Derlega et al. (1987) も、心理療法における相談者の自己開示は、相談者にとって自分の抱えている問題を明瞭にする上で重要であることを報告しており、本研究は改めてこの点を実証したと言えよう。

引用文献

- Altman, I., & Taylor, D. A. 1973 *Social penetration: The development of interpersonal relationships*. New York: Holt, Rinehart, & Winston.
- Blyth, D. A., & Foster-Clark, F. 1987 Gender differences in perceived intimacy with different members of adolescent's social networks. *Sex Roles*, 17, 687-718.
- Buhrmester, D., & Furman, W. 1987 The development of companionship and intimacy. *Child Development*, 58, 1101-1113.
- Burnard, P., & Morrison, P. 1992 *Self-disclosure: A contemporary analysis*. Aldershot, England: Avebury.
- Camarena, P. M., Sarigiani, P. A., & Petersen, A. C. 1990 Gender-specific pathways to intimacy in early adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, 19, 19-32.
- Crockett, L. J., Losoff, M., & Petersen, A. C. 1984 Perceptions of the peer group and friendship in early adolescence. *Journal of Early Adolescence*, 4, 155-181.
- Derlega, V. J., Margulis, S. T., & Winstead, B. A. 1987 A social-psychological analysis of self-disclosure in psychotherapy. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 5, 205-215.
- 飛田 操 1986 悩みの相談からみた対人依存の発達について 日本教育心理学会第28回総会発表論文集, 418-419.
- Hunter, F. T., & Youniss, J. 1982 Changes in functions of three relations during adolescence. *Developmental Psychology*, 18, 806-811.
- Jourard, S. M. 1964 *The transparent self*. Princeton: Van Nostrand.
- Jourard, S. M. 1971 *Self-disclosure: An experimental analysis of the transparent self*. New York: Wiley-Interscience.
- Maslow, A. H. 1954 *Motivation and personality*. New York: Harper.
- Papini, D. R., Farmer, F. L., Clark, S. M., Micka, J. C., & Barnett, J. K. 1990 Early adolescent age and gender differences in patterns of emotional self-disclosure to parents and friends. *Adolescence*, 15, 959-976.
- Pennebaker, J. W., Hughes, C. F., & O'Heeron, R. C. 1987 The psychophysiology of confession: Linking inhibitory and psychosomatic processes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 781-793.

- Rieber, R. W. (Ed.) 1980 *Psychology of language and thought: Essays on the theory and history of psycholinguistics*. New York: Plenum. 集, 602-603.
- Rivenbark, W. H. 1971 Self-disclosure patterns among adolescents. *Psychological Reports*, 28, 35-42. 津留 宏・西平 直喜 (共編) 1986 現代青年の悩み 大日本図書
- 佐藤 寛之・下斗米 淳・飛田 操 1988 私の秘密－秘密を通してみたコミュニケーションの規定因としての対人関係－ 日本教育心理学会第30回総会発表論文 依田 新 (編集) 1980 現代青年の人格形成 金子書房
- Youniss, J., & Smolar, J. 1985 *Adolescent relationships with mothers, fathers, and friends*. Chicago: University of Chicago Press.